

特集

新しい学習評価のポイントを整理する

新学習指導要領の実施に伴う、新しい学習評価——
評価の観点と趣旨の変化、表現及び鑑賞の領域における評価方法の改訂、
そして新しい授業実践について、
小学校と中学校の実際に照らしてミーティングを行いました。
まとめとして、オブザーバーの小原光一先生からメッセージをいただいています。

鼎談のテーマ

1. 評価の観点とその趣旨

評価の何が変わり、何が変わらないのか？

2. 表現領域と鑑賞領域の評価方法を工夫する

(1) 音楽的な感受（〔共通事項〕の事項ア）をどう評価し、育てるか

(2) 言語活動の在り方と評価

3. 小学校の実践 「音楽づくり」から

4. 中学校の実践 「鑑賞」から

5. 評価の改善をこう考える

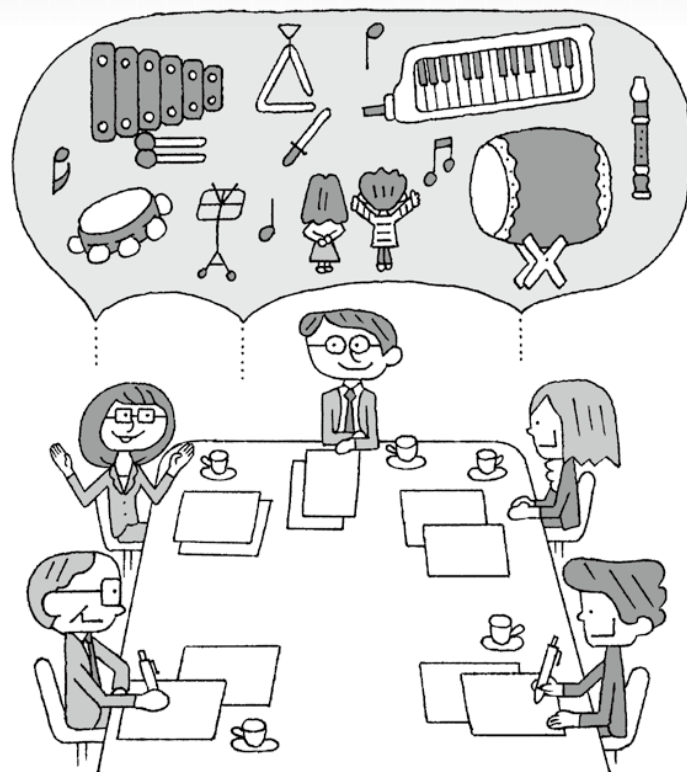
出席者

森島 徹 先生 [文京区立青柳小学校]

石井ゆきこ 先生 [荒川区立尾久第六小学校]

新藤 緑 先生 [新宿区立牛込第一中学校]

小原光一 先生



1.

評価の観点とその趣旨

評価の何が変わり、何が変わらないのか？

新藤：以前の相対評価では、すべて点数化して合計し、7%、24%などと切っていました。歌のテストをした場合でも100点満点とし、同じ点数でも5と4とに人数を分けなくてはなりませんでした。保護者や生徒から「どうしてこの成績か」と質問されても、「人数がこうです」と言えましたが、絶対評価になってからはそうは言えなくな

り、「根拠をもって」ということの大切さを痛感しています。

特にその中で苦勞したのは、「音楽的な感受や表現の工夫」です。しかも鑑賞の場合にはどこまでが「音楽的な感受」でどこからが「鑑賞の能力」なのか。そういったことを模索しながらいろいろな研究授業を参観したり、自分でも試行錯誤したりして、最近になって納得する評価ができるようになってきたところですが、ここへ来て、またそれがなくなってしまった。今までは、例えば「要素について聴き取ったことを記入しよう」という部分は「音楽的な感受」で評価していましたし、「この曲の魅力はこれこれだと思います」という批評文は「鑑賞の能力」で評価していました。これが一度に済む、全体を見渡して生徒の感受と鑑賞能力と総合してくることができるようになったということは、評価する側からみれば、分かりやすくなったと思います。

ただし、「音楽的な感受や表現の工夫」で、今までは鑑賞と表現の両方を評価していたものが、今回は表現だけになってしまう。「関心・意欲・態度」と「鑑賞の能力」だけだと、努力はしているものの表現が今ひとつうまくできない、でも感受が鋭くよい聴き取りができて、鑑賞の面ですばらしいものをもっていきる生徒が評価されなくなってしまわないか心配です。表現は3つの観点で評価されるので、そういう「感受の鋭い生徒」が不利にならないよう、偏った評価にならないようにしなければいけないと感じています。今までは25%ずつの割合で評価してきましたが、そのパーセントを変えて、多少鑑賞を高くするようにしていけば、解決できるのかもしれない。

石井：小学校は、評定に結び付けた評価という面では、中学校ほど差し迫ってはいないかもしれません。ただし、評価の観点から「音楽的な感受」とい



評価の観点とその趣旨の新旧[小学校]

[中学校] → 13ページ参照
[高等学校] は紙幅の関係で割愛

「A表現」領域（小学校）

新	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の 創意工夫	音楽表現の 技能
	趣旨	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、音楽表現や鑑賞の学習に自ら取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	音楽表現をするための基礎的な技能を身に付け、歌ったり、楽器を演奏したり、音楽をつくったりしている。
現行	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽的な感受や 表現の工夫	表現の技能
	趣旨	音楽に親しみ、音楽を進んで表現し、鑑賞しようとする。	音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し、生かしている。	音楽を表現するための基礎的な技能を身に付けている。

「B鑑賞」領域（小学校）

新	観点	音楽への 関心・意欲・態度	鑑賞の能力	
	趣旨	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、音楽表現や鑑賞の学習に自ら取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考え、味わって聴いている。	
現行	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽的な感受や 表現の工夫	鑑賞の能力
	趣旨	音楽に親しみ、音楽を進んで表現し、鑑賞しようとする。	音や音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し、生かしている。	音楽を楽しみ聴取、鑑賞し、そのよさや美しさを味わう。

*本文中、p.5とp.13の新旧対照表とp.6のイメージ図は、大熊信彦文部科学省教科調査官の資料を、許可を得て掲載しました。

う言葉が抜けたことについては心配しています。あれほど大事だと言われたことが、なくなってしまったと思われる方がいるのではないかと。今回の学習指導要領に[共通事項]が示され、[音楽表現の創意工夫]と[鑑賞の能力]の中に「音楽的な感受」がしっかり含まれたのだ、という意図を理解しなければいけないと思います。

鑑賞については、新藤先生と同じように感じています。[音楽的な感受や表現の工夫]と[鑑賞の能力]が一つになったことで気楽になった反面、「両方あってこそその鑑賞の能力」であると考えなくてはならないので、こちらがきちんと意識していかなければ、と思います。

今回、国研から出された評価の具体例は、学習指導要領の内容がはっきり示されており、すっきりしてよいと思っています。ただ、学習指導要領そのままの文言が含まれているので、私

ちが評価するときは、実際の授業で見られる子どもの姿に寄り添った具体的な言葉にする必要があります。指導案を作成するときに、これをそのままコピー＆ペーストしてしまうと、何を評価するのか分からないような評価規準ができてしまうおそれもあるので、気をつけたいところです。

また、[音楽表現の創意工夫]では、「考えや願い、意図をもっている」という言葉で終わった具体例が示されました。子どもたちの思考・判断、思いや意図、学習の過程などを見取ろうということが、これまで以上に強調されています。しかし、私たちが実際に評価するときには、何をもちて願いをもっているのか、どうやって子どもの思いや意図を見取ろうとするのかということ、をよく考えなくてはならないと思っています。

森島：「思いや意図」については、「観察する」ということになっています。

その「観察」という言葉ですが——やはり人間には個性がありますから、表現力がとても豊かな子どももいますし、思いや願いをたっぷりもっていても、表に出さない個性もあるのではないのでしょうか。表現に対しての温度差のようなものがあると思うのです。同じようにワークシートや発言からも、子どもの性格に関わる部分を感じることがあるかと思います。指導計画の中で、先生方は「ここを見取る」「この部分を見取る」といったように分けて認識していらっしゃると思いますが、音楽は特に内面的なことに関わる教科なので、見取るといっても正直難しい部分があると思います。学習指導要領の学年目標の最初に「興味・関心」がうたわれていますし、その重要性については意図があると思いますので、それをどう日常の授業の中で評価に反映していくか、というのが皆さんの悩みではないだろうかと思います。

2.

表現領域と鑑賞領域の評価方法を工夫する

(1) 音楽的な感受 〔共通事項〕の事項ア)を どう評価し、育てるか

新藤：今までは教材があってその曲を教える、つまり合唱であれば『時の旅人』をしっかり仕上げるという感じでした。それが例えば『小フーガ ト短調』の鑑賞であれば音の重なり方、形式や

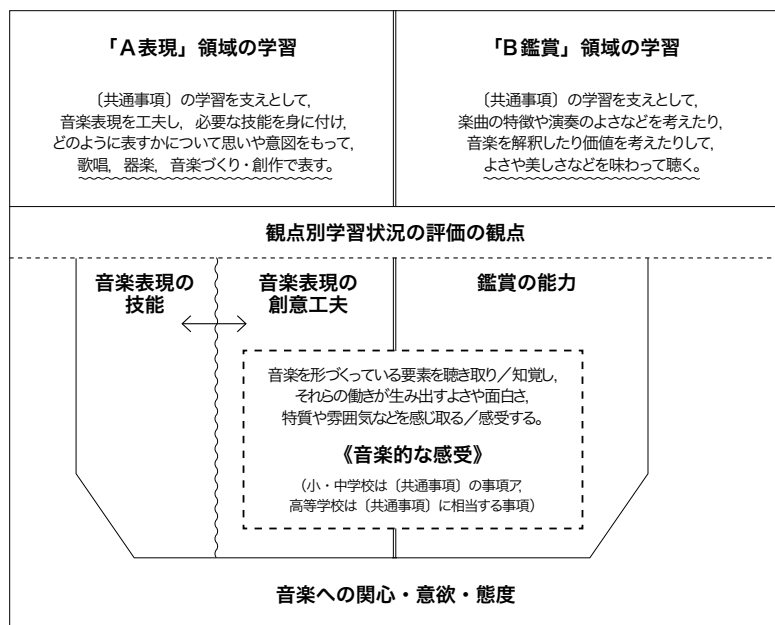
音色を教えたいなど、授業の中で身につけさせたい音楽的な力を明らかにして、指導事項を位置付けたい、ということになってきました。こうした学習の支えとなるのが〔共通事項〕です。今まではややもすると、合唱コンクールに向けて「きれいに仕上げればいい」ということに重点が置かれていたけれども、それだけではなくて、「強弱の変化」「他の声部との絡み合いに気付かせる」などといったことも教えていくことが大事になってきています。歌唱だけ、鑑賞だけではなくて〔共通事項〕を中心に、いろいろな教材を組み合わせて領域を横断して教材の組み立てをしていくのが、これからの課題です。難しいことですが、内容の組み合わせを工夫した指導案づくりによって、おもしろい授業が展開できると思います。よい教材を見つけていくことが大

切になってきますね。

石井：小学校では、低学年ほど歌唱、器楽、音遊びなどの表現や聴く活動を1単位時間に組み込むので、中学校よりも表現と鑑賞のリンクはしやすいかもしれません。小学校の先生方は早くから表現と鑑賞の関連に取り組んでいたと思います。でも、高学年になるにつれて教材の内容が高度になり、その中にいろいろな要素が含まれてくるため、〔共通事項〕をしぼり込んで、どのような題材をつくっていいか、ということが難しくなるように感じています。このあたりは中学校と共通する課題かもしれません。ただし、以前から小学校では「学習内容の明確化」といわれてきたので、私は今回示された〔共通事項〕によって、音楽科としての内容を絞り込みやすくなったと感じています。

森島：私の考えですが、〔共通事項〕とは「最低限これは押さえないよ」というものだと思っています。知識基盤社会と言われる中で「音楽の知識とは何か」といえば、〔共通事項〕で示されている音色やリズム、速度なのだと思います。ただ、今回は「音楽の活動を通して」これらの〔共通事項〕を学ぶということです。以前の学習指導要領での「基礎・基本」で起こったような知識アレルギー的な反動はないと思っています。扱っている題材とは関係なくとも、〔共通事項〕はいつも触れてよい、音楽活動を通して、いつも意識してほしいというものではないでしょうか。私が授業をしていた頃、譜面台に共通事項のようなものを貼り付けておいた時期がありました。子どもたちが音楽室に来ると、ジャンケンをして勝ったほうが記号などを指さし、負けたほうが「ト音記号」とか「フォルテ」などと答えるのです。ジャン

これからの音楽の学習指導とその評価(イメージ図)



【新しい学習評価のポイント】

- ・《音楽的な感受》(小・中学校は〔共通事項〕の事項ア、高等学校は〔共通事項〕に相当する事項)は「音楽表現の創意工夫」と「鑑賞の能力」に共通して位置付けられ、「A表現」と「B鑑賞」それぞれの学習を支えるとともに、両領域の関連を図る上でも鍵になる。
- ・「A表現」の学習では、図に→で示したように、「音楽表現の創意工夫」に係る力と「音楽表現の技能」に係る力を相互にかかわらせながら伸ばしていく。
- ・「音楽への関心・意欲・態度」と他の三つの観点は密接に結び付いており、学習内容に関心をもち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする意欲や態度をなくくむことが、歌唱、器楽、音楽づくり・創作で表したり、よさや美しさなどを味わって聴いたりする学習を意味あるものにする。

ケンを繰り返し、授業が始まる前に遊び感覚ながらも習慣的に続けていたと記憶しています。そんなふうに、1回や2回の試験だけではなく日常的に学んでいくことが、私は「音楽の活動を通して」という中に込められているのではないかと思います。

新藤：「思いや意図」といった「音楽表現の創意工夫」が強調されている点については、ただでさえいいということではないと思います。「鑑賞の能力」という面でも批評文が出てきます。単なる感想文ではなく、どこがよかったのかを自分の言葉ではっきり言える生徒を育てることが望まれています。「感じていても書けない生徒がいるのではないか」「文章力がある生徒が高い評価をもらうのか」と耳にすることがありますが、そこは中身をこちらがしっかりと見ればよいのです。ただ文章が上手で美辞麗句を並べている生徒なのか、本当にそう感じて書いているのか、その見極めはつけられるものです。繰り返し続けることで、生徒たちは変化してきます。

例えば、歌のテストでも実感することがあります。「恥ずかしいから別室で試験をしてください」という生徒がいるのですが、私はそれには反対です。全員の前で歌わせて、生徒たちにも互いに評価をさせます。そうすると、初めは「声が聴こえる、聴こえない」「音程が合っている」「姿勢が悪い」ということしか書けなかったのに、だんだんと「のばすところをきちんとのばしている」「強弱をつけている」「発声の仕方が曲に合っている」などと聴き取れるようになってくる。やはり、育てることが大切なのです。

(2) 言語活動の在り方と評価

新藤：先日、『アイダ』と『勸進帳』を扱った研究授業を参観しましたが、『アイダ』では第2幕第2場の最後



●もりしま・とおる
文京区立青柳小学校長

の5分間のうちのさらに1分半、というように焦点を絞って、「共通事項」を抽出していました。長唄『勸進帳』は、私も鑑賞で扱いますが、歌わせてみてもただ歌って終わりになってしまいがちです。それをあえて“ついに泣かぬ弁慶も〜”というしみじみした場面を取り上げて、どのように工夫して歌うのかグループで話し合わせるという授業でした。焦点を絞って、少ない時間で何を教えるのか、という点で参考になりました。また、その中にグループ活動による言語活動も入っていたのです。

書くことについても、生徒たちはさまざまな体験を積み重ねていく中で語彙も豊富になりますし、自分の感情も言葉で表せるようになってきます。社会に出れば、「感じている、思っているけれど、それを表せないのはしかたがない。それでいいじゃないか」では通用しません。こうした力を育てるのは大変かもしれませんが、書かせたり話し合わせたり発表させたりすることは、思考力・判断力・表現力を育てるために大事ですし、訓練で伸びるものです。こちらがそこを正しく理解して、やみくもに書かせるだけの指導は改善

しなければならなかったと思いました。確かにワークシートを書かせると評価が大変です。でもその繰り返しを大事にしていこうと思っています。

石井：「書く」ことについての話題が出ましたが、いつも同じ方法ではいけないと思います。その点、教師側の工夫も必要になってきます。昨年、効果があったのは、鑑賞で聴いて気がついたことや感じたことを付箋に書き出していくというワークショップの手法を取り入れた実践です。1枚の付箋に1つの内容を書き、それを出し合って、グループで似た意見をまとめていくという…ちょうど今、教員の研修でよく行われていることを子どもたちと試してみました。この活動のよい点は、意見が出しやすいのでたくさんの意見が出てくることです。ふだんあまりまとめて書けない子どもが、短い言葉で的確に音楽の特徴を捉えて表現しているのを見て、ハッとしました。美文で長々と書き表すことばかりがよいのではない。友達と感じたことについての交流ができるという点からも、付箋の活用はおもしろいと思っています。小さい子どもであれば、体の動きで表現したり、絵を描かせたりということも工夫しながら楽しく感じ取り、それを表せるようにしていきたいですね。

さきほど新藤先生から、中学校3年間で言葉で表現する力がだんだんとついてくるというお話を伺い、少し安心しました。小学校ではなかなか育てられずに中学校へ送り出して、申し訳ないなと思っていましたので。中学校までを見通した9年間での成長があると思うと、希望の光が見える気持ちです。小学校の鑑賞に「言葉で表すなどして」という文言が入ってきて、今までと違う特別なことをしなければいけないのでは…とプレッシャーを感じていましたが、少しゆったり構えてもいいのかな、と思いました。

3. 小学校の実践 [音楽づくり]から

石井：昨年度、4年生で「音階（ドリア旋法）をもとに工夫してつくろう」という音楽づくりの授業を行いました。導入では「かえるの合唱」を高長調とドリア旋法で聴き比べ、次にドリア旋法のトーンチャイムを1人1本ずつ持たせ、集団でメロディーをつくるゲームをしました。最初は隣りの人に音を伝えるのですが、2回同じ音を鳴らしてもよい、離れた音につないでもよ

い、といった旋律づくりのアイデアを子どもたちが考えていくようにしました。このような活動を通して、自然と旋律のつくり方に気付いていきました。その後のグループ活動では、旋律やリズムを重ね合わせて音楽をつくります。この授業では「変化をつけるにはどうしたらよいか」を課題として、強弱や速度、音の重ね方、問いと答えなど音楽を形づくっている要素を使って工夫するようにしました。

今回、評価の観点が変わることに伴い、昨年度に実施した授業の評価を見直してみました。（資料1）国研の資料を参考に「発想をもって」という文言を加えましたが、これは1時間だけで見取れるものではありません。継続して見ていく必要があると思います。これまでも言われてきたことですが、「この時間にこの観

の評価がいちばんふさわしいのか」「より具体的にならないか」「評価方法は適切か」「Cと判断されそうな学習状況の子どもへの手だてを考えているか」など、自分の中でより明確な視点をもって評価できるようになりたいと考えています。



●いしい・ゆきこ
荒川区立尾久第六小学校教諭

資料1

時	主な学習内容・学習活動の例	単位時間ごとの評価規準の具体例	Aと判断するポイント
1・2	○音階が醸し出す雰囲気や旋律の特徴を感じ取る。 ・ハ長調とドリア旋法の「かえるの合唱」を聴き比べ、音階が醸し出す雰囲気の違いに気付く。 ・「スカボロー・フェア」を聴き、ドリア旋法が醸し出す楽曲の雰囲気や口調とその変化に気付く。 ・レミファソラシド（ドリア旋法）のトーンチャイムで乱数的に旋律をつくる音楽ゲームをする。	ア① ドリア旋法が醸し出す楽曲の雰囲気や口調とその変化を感じ取って聴く学習に進んで取り組もうとしている。 ア② ハ長調とドリア旋法の音階が醸し出す曲調の違いに感心を持ち、即興的に旋律をつくる学習に進んで取り組もうとしている。	□集中して聴き、曲調の変化に敏感に反応する表情 □感じ取ったことについての積極的な発言 □音階の違いについての熟練的な発言 □自分の発想を生かした即興的な表現への意欲的な取り組み
3・4・5	○ドリア旋法をもとにしたグループの音楽をつくり、パートの役割や曲想とその変化を感じ取る。 ・グループで使う楽器を選ぶ。 ・低音、伴奏、旋律、節り、リズムの役割を分担し、音を重ねて即興的にグループの音楽をつくる。 ・「そろりうた」（オリジナル）を聴き、旋律や伴奏の反復と変化を聴	イ① 楽器の音色や音の重なりを感じ取り、どのようにグループの音楽をつくっていくか発想をもって、音の響きやその組み合わせを工夫している。 エ 旋律や伴奏の反復と変化を聴	□音の響きや組み合わせの効果を考えた楽器の選択 □音の重ね方についての新たな発想 □反復と変化について

（石井ゆきこ先生の指導案 第4学年「音階から音楽をつくらう」より）

4. 中学校の実践 [鑑賞]から

新藤：『小フーガ ト短調』は昔からある教材ですし、最近ではゲームなどなじみのある生徒たちにも親しみのある曲です。本校のある新宿区の場合、音楽鑑賞教室として2年生でオーケストラとパイプオルガンの生の演奏を聴きますので、必ず2年生の授業で取り上げます。

今まではワークシート（資料2）の真ん中のように「（ ）声部に（ ）回」

主題が出てきたと答えるなど、ゲーム形式にして興味をひいたり、DVDでパイプオルガンの仕組みを説明したり、バッハの生涯について説明したりしていました。これが、今回の〔共通事項〕によって、ただ「フーガ」を教えるのではなく、音の重なり方という「テクスチュア」をどう感じ取り、聴き取るのか、ということをメインにした授業展開となりました。また、今回テクスチュアという文言が示されたので、特にこの曲では「パイプオルガンの音色」「独特の旋律」「音のからみ・4声で流れていくテクスチュア」「フーガという形式」という、4つの〔共通事項〕について聴き取る活動も実施しました。さらに新しい試みとして、グループでの言語活動を取り入れました。4人のグループごとに「音色」の班、「旋律」の班などと割り当てて曲を聴き直し、感じ取ったことをみんなでまとめて発

表します。そうすると核になる生徒がいる班では、思った以上の聴き取りができることもありますし、同じ「音色」を聴き取るにしても、班ごとに意見が異なる場合もあり、互いに意見交換をして高め合うことができました。



●しんどう・みどり
新宿区立牛込第一中学校主幹教諭

資料2

音の重なりを感じ取り、フーガの美しさを味わおう①

2年 組 番（ ）

①この曲を聴いて、次の音楽の要素について、聴き取ったことを記入しよう

要素名	あなたの聴き取ったこと・感じ取ったこと	他人の聴き取ったこと・感じ取ったこと
音 色		
旋 律		
テクスチュア		
形 式		

②この曲の題名は？ 「
フーガとは？ →（ ）音楽のひとつ
→主題が形を変えながら、いくつかの声部に繰り返し現れる形式
（ ）声部に（ ）回

③主題が、どの順番でどの声部に現れるのか、チェックしよう。

ソプラノ
アルト
テノール
バス（ 鍵盤）

（新藤 緑先生が授業で用いたワークシートより）

5.

評価の改善を こう考える

森島：いつの時代も、「子どもたちに幸多かれ」という気持ちで改訂が行われていると思います。ただその時代時代で、日本の抱える問題は変化しますし、それが教育の課題にも反映されています。今は「先の見えない時代」とよく言われます。そういった中で「知識基盤社会」という流れにあるのではないかと私は受け止めています。1回のテストで評価するのではなく、日常的に見ていこう、観察、ワークシート、発言など授業の一つ一つから、子どもたちのよさを見ていくということでしょう。PDCAサイクル*も話題になっていますが、学校も授業改善プランをつくったり、評価計画の見直しをしたり、手間のかかる作業ですが、子どもたちにできる喜びを感じてもらおうよう努力することが大切です。「自主的」「思いや意図」などを見取っていきましようということです。今回の学習指導要領も、そういったことを意識した改訂ではないかと受け止めています。ですから、さきほどの〔共通事項〕も、音楽の活動を通して学んでほしいという文科省の願いが表れているような気がしています。

小学校にもAET (ALT) と呼ばれるネイティブの講師が来ています。子どもたちは英語が分からないながらも楽しんで授業を受けているようです。音楽で考えれば、そもそもの目的である「楽しく音楽と関わる」という内容が大切なんだと思います。ただ、歌唱

や器楽に比べると音楽づくりはどうしても敬遠されがちです。それは、評価基準がつくりにくいからかもしれません。音がきれい、整っているという概念からすれば、子どもたちのつくった音楽をAと判断するのか、Cと判断するのか…その整理がしにくいのではないのでしょうか。

また、ある子どもの活動を見ることができなかった、というのは、器楽でも歌唱でもあることなんです。問題はそのことではなく、どういう活動を見取ったらよいのか、基準がつくりにくいことだと思います。また一般の公立学校のように、小中の連携が取りにくいと、中学校では小学校でどのような活動をしてきたのか分かりにくいです。し、中学校は数校の小学校から入学してくることが多く、小学校間の温度差もあります。〔共通事項〕はそこを改善するためにつくられたのではないかと受け止めています。

*PDCAサイクル：Plan (I1)、Do (I2)、Check (I3)、Action (I4) のサイクル。

石井：評価に負担感をもっている先生もいらっしゃるので、できるだけ効率的な評価を進めよう、ということが課題になっています。平成14年度に国研から出された資料は評価基準がたくさん立てられていて、きめ細かく子どもの学習状況を評価をしていこうというものでした。今回も基本の精神は変わっていませんが、もう少し幅をもたせて子どもの成長を見ていきたいと思います。自分の実際の授業を考えても、指導案上はこの時間はこれ、と決めるものの、次の時間も継続して観察したり指導したりすることがよくあります。今、5年生とブルースの循環コードで音楽づくりをしています。この前、おもしろい表現をしていた子が活躍してくれるかなと期待して見ていたらそうでもなかった。なぜだろうと思ってワークシートを見ると、その時間にはみんなの前で表現しなかったけれど、旋律の特徴や即興的な表現の仕方についてじっくりと考えていたことが書かれていました。私たち教師は授業の表面に見えることだけでなく、そういった周辺からもいっぱい情報を集めて、子どもの状況や思いを見取っていかねばなりません。

新藤：旋律創作やリズム創作の場合は、作品の評価がはっきりしているのだからやりやすいと思います。例えば、音符が4拍子に当てはまっていれば最低Bをつけるとか、工夫して無理のない旋律になっていればAにするなどですね。しかしそれ以前の問題として、グループ活動にしてしまうと、個々の評価ができないことが中学校としてはネックです。やはり「いい作品ができてよかったね」ではなく、一人一人に評価を返すとなると、「この班は全員Aにする…」そうするとその先にある評定、内申に「ん…」と思ってしまう。ですから、私は個人の作品で評価します。ある程度は、この子が中心になっているというのは分かりますが、同じ作品をつくっているのにこっちはAでこっちはBというのもまた難しく、そこがジレンマになるので、私はグループ活動はせずに、リコーダーを吹きながら個人で音楽をつくらせ、どれだけできたかを評価します。本当は楽しくグループで話し合ったり、即興でつくったりというのがいいのですが…。評定がなければいいのですが、シビアなものなので。鑑賞の場合は、グループ活動をしていても本人の聴き取りだとか、最後の批評文で評価ができます。合唱コンクールに向けてみんなで曲を仕上げて、金賞を取ったからそのクラスは全員Aかといえば、そうではないですよ。やっぱり個々のテストはあとでするわけで、それと同じだと思います。



石井：「音楽づくりの評価が難しい」という話をよく聞きますが、そういうことがあったのですね。音楽づくりにあまり取り組めていない先生だと、「○年生ではこれぐらいの音楽をつくる」という見通しがもてない、つまり目標がはっきりしないため評価に困っているような気がします。グループ活動については、演奏や作品だけではない評価方法を工夫しなければいけないと思います。

森島：懸念になってしまうのですが、評価の技術論や形式に走ったり、言語活動を形だけ取り入れたりすることは避けたいと思います。もう指導要領の解説書なども出ていますが、それをただペーストして授業をしました、では改訂の意味が生きないと思います。興味・関心と技術とがありますが、本当に大切なことは、そもそも興味・関心の薄いどのような子どもからも関心・意欲を引き出す活動することだと思います。音楽経験のない子どもでも音楽のおもしろさを感じる、表現を工夫してみようとするような、こちら側の指導力、指導の質の問題です。文

言は「取り組もうとする」「意図をもっている」「表現している」と非常に客観的なんですが、土俵をつくって(単元を設定して)相撲に取り組ませ(音楽活動に取り組ませ)それを見ているということではなく、ときには教師も土俵に上がり、子どもと相撲を取る。いっしょに、活動して引き出すということ、そして興味・関心の薄いどのような子どもにも、分かりやすく要素に気づかせる、一人一人の受け止めを大切にするような指導が大切だと思います。ここに90%の力を注ぐべきです。評価の観点とは、「先生方、それをどうか引き出してください」という意味ではないでしょうか。

それからもう一つ。音楽は算数の評価や国語の評価とは少し違うところがあると思います。「九九を覚える」「漢字を覚える」ということと、音楽の「ト音記号の名前を知っている」というのは、同列にはできないものではないでしょうか。子どもの心を豊かにする、これからの人生を豊かに生きてもらうためには、場合によってはト音記号は忘れてしまってもいいのかもしれない。

「音楽って楽しい！」という気持ちさえもってくれたら、と思います。そのうえで、日本という国の状況、時代の要請もありますから、今求められている「生きる力」ということについては、書かれている内容は知っておかなければならない、意識しなければならない。しかしそれを形だけ行うのではなく、まず教師が子どものもっている力を引き出していく、ということが、新指導要領を受け止めるときに大切であると思います。

新藤：今回の改訂内容や、評価についても、やはり勉強しなければいけないですね。他の人の授業を見ることは本当に大切ですが、なかなか出張に出られない、学校が大変というケースも多いと思います。特に音楽は学校に音楽科の先生が一人、というところが多いので、一人で抱えて悩むよりは、研究大会などを見て、授業を改善していかなければいけませんし、そうでないと改訂内容にも追いつけないと思います。旧態依然とした授業に固執せず、若い人はもちろん、ベテランの先生方も学ぶ姿勢を大切にしてほしいと思います。

ミーティングに参加して

小原光一 [前横浜国立大学教授]



「新しい学習評価のポイントを整理する」というテーマで話し合われた〈ヴァン〉の座談会に同席させていただきました。お集まりの皆さんは、それぞれ学習評価に精通されている方々ばかりだった上に、現在直接授業に携わっておられるお二方からは具体的な実践事例も交えたお話しもあつたりで、終始活気にあふれた雰囲気の中での素晴らしい話し合いの場でありました。そのような中で私なりに感じたり、思ったりしたことなどを少々述べてみたいと思います。

新学習指導要領に基づく新しい教育課程が、いよいよ平成23年度4月からは小学校で、24年度には中学校においても全面実施の運びとなります。学習指導要領が新しくなるのですから、それとの連動という意味では「学習評価」も確かに新しいものになります。しかし既にご承知のように、これからの教育はベーシックな部分では今までどおり「生きる力」の具現化を一番の狙いにしていますので、新しい学習指導要領も大きな様変わりはありません。現に新学習指導要領における〈教科目標〉を見ても、小学校は現行のものと言一言句変わっていませんし、中学校も「音楽文化についての理解を深め」の文言が新たに加わった以外は現行のものと同じです。

これからの教育が目指そうとしている方向のベースとなるものが現行のそれを引き継いでおり、音楽科の教科目標も変わらないということになると、評価につ

いての考え方だけが変わるという必然性はないことになります。したがって、基本的にはこれまでもしてきたことを軸に、更に丁寧に深めていけばよいのだということになります。評価に関して大上段に構えて新たに何かをしなくてはならないということはありません。

とは言え世の中はどんどん動いていますので、そうした状況に合うように考えを変えるべきところには修正が施され、より実情に合うものとなるように改善されています。その辺りにぐっと踏み込んだ話し合いでしたので聴き応え十分でした。

ところで、昨年の11月に文部科学省のホームページには〈審議会情報〉として、中央教育審議会の初等中等教育分科会教育課程部会による「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）の概要」というのが掲載されています。その中の〈学習評価の方向性について〉の部分には、学習指導要領と学習評価の因果関係に触れて両者が一体であるべきことの重要性を述べた上で、「今後とも各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDCAサイクルの中で適切に実施されることが重要である」と書かれている件があります。従来とも指導と評価の一体性については重要な視点として特段の配慮をもって進められてきていたところであると思われますが、こうなりますと、これからは指導との連携を一層しっかりと視座に据えて、Plan、Do、Check、Actionという一連のサイクルをどのように構想するのかという研究がしっかりと行われなくてはならないということになります。

これは、これからの大きな課題の一つであるといえば確かにそうなのですが、今まではPDCAが意識として頭の中に位置付けてはいなかったというだけのこ

とであって、実際にはその考えと大同小異のものが作られており実践もされていたというのが大方の実情だったのではないかと思います。ですがこれからは、PDCAという考え方を意識の中にしっかりと置いて、学習や評価の活動に反映させていくようにすることが大事であると思います。

さて、日頃先生方は少ない授業時数の中でいろいろとやり繰りをして多くの成果を上げるべく指導を進めておられるわけですが、学習指導要領が改訂されますとそのポイントと目される事項が浮上してきます。今日この場でもそうした中の幾つかの事柄が話題となり、それぞれの事項における評価との関わりなどについて話しがはずみました。

そのうちの一つで、音楽科にとって大きな関わりをもつことになる〈言語活動〉ですが、それを授業の中でどう取り扱っていくのか…。

学校は本来、集団で活動するのが基本の姿ですから、そのような利点をうまく活用していくことが得策なのではないでしょうか。自分の思いを人に伝える場合、〈書く〉という手段でするならば一人でも活動は可能ですが、大勢の中で各自の考えを述べて互いに示唆を受け合うというような活動では、当然のことながらある人数がいてこそということになります。この辺りのことも含めて〈言語活動〉なるものを広い視野で捉え、方法的にもいろいろなやり方を工夫するようにして、音楽科にとって意義のある活動に定着させるべきであると考えます。

更にもう一つ大きく話題として取り上げられていたのは〈共通事項〉のことでした。これは一見学習指導要領の中に今回初めて登場した新しい内容であるかのように見えますが、そこに示されている中味とは言えばその殆どが従来とも学習指導要領に盛り込まれていたものであるのです。ただそれが内容の事項として本

評価の観点とその趣旨の新旧[中学校]

「A表現」領域（中学校）

新	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽表現の 創意工夫	音楽表現の 技能
	趣旨	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。	創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身に付け、歌唱、器楽、創作で表している。
現行	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽的な感受や 表現の工夫	表現の技能
	趣旨	音楽に親しみ、音楽を進んで表現し、鑑賞しようとする。	音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し、生かしている。	音楽を表現するための基礎的な技能を身に付けている。

「B鑑賞」領域（中学校）

新	観点	音楽への 関心・意欲・態度	鑑賞の能力	
	趣旨	音楽に親しみ、音や音楽に対する関心を持ち、主体的に音楽表現や鑑賞の学習に取り組もうとする。	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、解釈したり価値を考えたりして、よさや美しさを味わって聴いている。	
現行	観点	音楽への 関心・意欲・態度	音楽的な感受や 表現の工夫	鑑賞の能力
	趣旨	音楽に親しみ、音楽を進んで表現し、鑑賞しようとする。	音や音楽のよさや美しさを感じ取り、それらを音楽活動の中で創意工夫し、生かしている。	音楽を楽しく聴取、鑑賞し、そのよさや美しさを味わう。

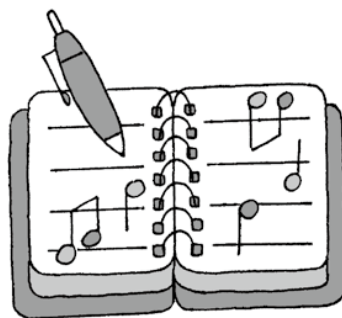
文の中に文章の形で示されていたものから、目にすっきりとは映りにくかったという状況があったと思われます。そこを今回は〔共通事項〕という新たな括りでまとめて示していますので、見た目にも大変分かり易くなりました。また、意識の上での濃淡はあったにせよ、そこに内容として示されていることどもは、誰も取り扱っていたであろうと推察するのに難くないので、これまた新たに構えて何かをしなければならぬという気の重さなどは全くなくてすむはずです。ただ、これらのことを支えにして学習を展開することによって子どもたちの音楽力を一層確かなものに高めていこうとする意識だけは、この際新たに持つようにすることが大事だと思います。

その際、よく分かっているはずですが改めて気を付けたいのは、〈〔共通事項〕を教える〉という感覚に陥らないということです。〈初めに〔共通事項〕ありき〉ではなく、まず自分として年間の指導をどう進めようとするのかの構想を練り、年間指導計画に題材を配列したならば、その中に〔共通事項〕に示されている内容が落ちなく取り込めているかどうかを

検討してチェックをし、調整を図るというのが筋道だということをしっかりと押さえて置くことが必要であるということです。小中学校とも〔共通事項〕のリード文には「『A表現』及び『B鑑賞』の指導を通して、次の事項を指導する」とあることについては言を待つまでもありません。

新しい学習評価をめぐって、中味の濃い示唆に富んだ内容を多く含んだ話し合いがされていたので、アツという間に時間が過ぎていきました。先程も申しまし

たように新しい学習指導要領の中味も、それと連動することになる学習評価も、基本的にはこれまでと大きく変わってはいません。それ故、これまでやりたくてできなかったこと、もう工夫ありたかったが果たせずにいるところなどに修正を加えたり解決の糸口を見出したりして、学習や評価の質を更に高いものにしようとするのには、絶好の機会になると思います。是非そのようにして、音楽科教育の一層の発展のために力を合わせたいものだと思います。



授業者に訊く ①

長野県のほぼ中央に位置することから、
 “日本の真ん中”にある町と言われる辰野町を訪ねました。
 辰野西小学校の5年生による『冬げしき』を教材にした授業です。
 自分たちの思いが聴く人に伝わるように、子どもたちが表現を深めていました。

授業者：久保田直子

辰野町立辰野西小学校

本時の授業の位置付け

本時は「曲想を生かして表現しよう」という題材です。音楽会で、強弱や速度、音の重なりなどに徐々に変化をつけて盛り上がりのある合奏を経験した子どもたちが、歌詞の意味を手がかりにイメージを広げ、どのように表現したらそのイメージが聴いている人に伝わるかを、歌いながら考えていきます。合奏での表現活動は指導時間に含めず、合奏が盛り上がったのは何がどのように変化したからか〔共通事項〕の言葉を使って考えることから始め、全4時間の授業を計画しています。本時はその3時間目に当たります。

授業の流れ

	学習活動	指導や助言(・) 評価(☆)
導入	1.①『ともだち賛歌』(本時は『ごんべさんの赤ちゃん』バージョン)を、振りをつけながら歌う。 ・1回ごとにテンポを速くする。 ・最高音でロングトーン。高音の響き確かめたり感じたりする。 ②『ことの葉』を、歌詞や高い音が盛り上げることに気をつけて歌う。	・楽しい雰囲気になるようにする。 ・最高音のところでは、周りに響くようなイメージと響いた実感がもてるように声がけする。 ・歌詞の内容や、高い音によって曲の山がつくられていることに気をつけながら歌う。
展開	2.『冬げしき』のイメージが伝わるように歌ったり聴き取ったりする。 1～3番のイメージが伝わるように表現しよう ①グループに分かれ、自分たちの捉えたイメージが相手に伝わるように確認しながら練習する。 ②1つのグループの発表を聴く。 ・発表を聴いて、自分が感じ取ったイメージを色や言葉で表し、なぜそう思うのかを学習カードに記入する。 ③感じ取ったイメージを発表し合う。	・1～3番の歌詞や色のイメージを、どのように表現したら相手に伝わるか、歌いながら確認させる。 (本時注目させる要素) 強弱 速度 音色(表情) 発音 ・グループ巡視して、「大げさ」に表現しないと伝わらないことを助言する。 ☆歌詞の内容やイメージを相手に伝えようという意識をもって、グループ活動に参加している。 【グループ活動の聴取・観察】 ・伝えたいイメージを発表せずに歌わせる。 ☆発表を聴いて自分が感じたイメージを色や言葉で表すことができる。 【学習カードへの記入】 ・挙手する子どもがいない場合はカードに記入してある子どもを指名する。 ・発表したグループに、自分たちが表現したいイメージを聴き取ってもらえたかどうかを確かめる。
まとめ	3.発表したグループのイメージを生かして全員で歌う。	・1～3番のそれぞれのイメージを確認してから、そのイメージに近づけて歌うように促す。

思いを伝える歌唱活動

聞き手
永井基生
(上尾市立東小学校)

楽しみながらいい声を学ぶ

永井：発声練習として『ごんべさんの赤ちゃん』を歌っていましたが、子どもたちは元気いっぱいでしたね。

久保田：この曲は前半のメロディーが同じで振りがついているので、楽しんで声を出してくれるだろうと思って…。

永井：最高音をロングトーンにしたことでよく声が響いていましたね。

久保田：子どもたちはテンポをどんどん速くしていくと喜んで歌いますが、そのぶん声の出し方が荒っぽくなってしまいます。いい声を出そうという意識をもたせるために、最高音のところでロングトーンにさせました。

永井：体を動かすことで、どんどん声も出てきていましたね。

久保田：発声のときには体を動かして歌うとか、手遊びなどを取り入れたいと思っています。ただ、高学年になると子どもたちは恥ずかしいのかあまりのらないんですよ。

永井：5年生であれだけのっているといいですね。『ことの葉』という歌は？

久保田：今年は上伊那での都市連合音楽会50周年に当たり、『ことの葉』はその記念曲です。連合音楽会に参加した5年生が高い音をととてもきれいに歌っていたので、ぜひ発声にも使おうと…。

永井：「♪かぜがふいてきて〜」(mp)と歌い始めたときの「これじゃ大風だよ」という先生の言葉で、すぐに子



もたちの歌声が変わったのには驚きました。いつもあのような感じで声がけをされているのですか？

久保田：イメージに合った歌い方をしていないなあと思ったら、途中で止めてもう1回やり直します。歌いながら言うことも多いですね。

永井：それと、子音をすごく大切にしたいので、そこで気持ちを伝えようとなさっているのがよく分かりました。

久保田：言葉からイメージを膨らませたいので、子音はうんと大事に歌ってほしいんです。

歌詞の意味を手がかりに

永井：今日の『冬げしき』は私も授業で扱いますが、歌詞の内容を理解させ

るのが大変ですし、これを子どもたちの体験と結び付けるとなると、かなり難しいものがあるように思っています。先生は「色」を使って説明なさっていましたが、よく使われるのですか？

久保田：鑑賞のときに使いますね。ビバルディの『四季』の『冬』などは、暗い部分と明るい部分を色で表現させました。『冬げしき』では、子どもたちはまず「麦ふみ」を知らませんし、「港に泊めてある船に霜が降りている」というイメージも難しい。ですから1〜3番それぞれの歌詞の情景を、色でなら想像することができるかもしれないと思ったんです。

永井：歌詞を理解するために、言葉の意味のヒントが書かれたプリントを使



●くぼた・なおこ
辰野町立辰野西小学校教諭

っていましたが、その他には何か取り組みをされていますか？

久保田：最初に私が文語を意識して歌詞を読んで聞かせました。子どもたちは雰囲気を出して読むのを聞いて「カッコいい！」と感じたようです。写真を見せようと探したのですが、なかなかありませんね。

永井：子どもたちの実生活と結び付けて歌詞を説明なさっているのが、すごくよく分かりました。ところで、今日のようにグループに分かれて歌う活動はよくされているのですか？

久保田：そうでもないんです（笑）。クラスのほうでグループ学習を取り入れていると担任の先生から伺っているので…。いつもはほとんど一斉指導です。

永井：子どもたちのイメージをグループごとに統一していましたが、そのすり合わせはどう指導なさっていますか？

久保田：私はそれぞれの考えでいいと思っているのですが、今回はまとめさせるために、みんなで色を見せ合いなさい、と指示しました。それによって、自分と感じ方が同じ子もいるし違う子もいることに気付きます。違う子にはなぜそう思うのか話を聞くようにします。例えば「白」と「水色」。1人だけ「白」を選んでいたら子どもに話を聞いてみると「霜で冷たいから白なんだよ」と言い、他の子は「水辺だから」と…。なるほど、どちらもいいね、と。きっちりこういうイメージでなくてはならないというふうにはしていません。

永井：子どもたちが書いたことに対して「なぜ？」「どうして？」と必ず尋ねていましたが、いつもそのように？

久保田：子どもたちの場合、例えば強弱について言いたいのに、そうではない言葉が出てきてしまうことがあります。そこを直してあげたいし、どうし

てそう思うのかを聞いておけば、どのようなことを言いたいのかがきちんと分かりますから。

永井：それをクラス全体に返すことによって、他の子どもも自分では表現できなかった言葉の使い方に気付きますよね。子どもたちが意欲的に、主体的に思考を働かせて取り組む様子もたくさん見られました。仕上げの段階に入ったときは、どのようになさっていますか？

久保田：今日は1班のイメージで歌いましたが、いつもはたいてい「自分のイメージで歌ってね」と言っています。

表現を深めるための〔共通事項〕

永井：学習指導要領の「音楽を形づくっている要素」ですが、授業の中でどのように扱っていますか？

久保田：最近は意識して取り入れて





います。今日はどれを扱おうかと自分の中で考えるようになりました。例えば1年生でわらべ歌を指導するときに、今日はテンポに気付かせたいから、歩かせてみよう、とか。そして、歩いたらどういふうに感じたか、何がどのように変わったのか子どもに発言させています。

永井:子どもたちと、「速度」や「強弱」といった言葉で繰り返しやりとりしていくんですね。その言葉については、低学年でも高学年でも同じ単語を使うのでしょうか。

久保田:そうしようと努めています。なかなかできないところもあるのですが…。

永井:黒板に「音楽のもと」と表示されていましたが、表現を深めるための手がかり、また自分の気持ちを表現するために必要なのが例えば今日の場合で言えば、「強弱」であるということですね。そこをとても丁寧に説明なさっていました。〔共通事項〕の扱い方についても参考になりました。

久保田:教師が、今、何を扱っているのかということを分っていることが大

切なのだと思います。

できる子がみんなをリードする

永井:低学年から高学年まで、どのように歌唱指導をなさっているのか教えてくださいいただけますか。1年生や2年生の場合はとにかく「元氣よく」歌っていただければいい、というような感じですが、私の受け持つ4年生になって急に「美しく」歌うとなると、そのギャップが大きくて…。

久保田:1年生には「ミッキーの声で歌おうね」と言っています。最近は『きらきら星』を使ってどんどん音を上げていく練習もしますし、そのままの声で低いほうも歌ってみよう、とも言います。

永井:音を上まで上げたら、急に下ろしますか？それともだんだん下げますか？

久保田:両方です。クラスや曲によって違いますね。元氣のいい曲では、わざわざそういう声にはしません。1年生にはわらべ歌をよく歌わせます。どなって歌うことはできませんので。

永井:普通の高さで？

久保田:はい。

永井:先生は合唱団もご指導されていますが、学校の中での合唱団の役割をどのように考えていらっしゃるのでしょうか？

久保田:合唱団の子がクラスのみんなをリードしてほしいなと思っています。できる子はどんどんリードしなさい、と。体育の授業で運動のできる子はみんなを引っ張ってくれますよね。音楽の授業でも、やる気のある子が遠慮す



●ながい・もとき
上尾市立東小学校教諭

ることなく、音楽が得意ならどんどん引っ張っていったいいのよ、と言っています。引っ張っていく子がいると、いい声のクラスになりますね。

永井:音楽集会などでの役割は？

久保田:音楽集会では、合唱団をクローズアップすることはあまりありません。学年ごとに歌わせるぐらいです。6年生に歌ってもらったときは、「さすが大人っぽい声ね」と言ったりします。

「大げさ」に表現しよう

永井:授業のときにも思いましたが、先生は子どもたちをほめるのがすごく上手ですね。ほめられたことで子どもが元氣になっていました。ところで、変声期の男子はどう指導されていますか？

久保田:変声した子はそのまま裏声



で歌わせています。裏声だと音程も取りやすそうですし。混声三部の曲を扱うという先生もいらっしゃるようですが、私は中学校での指導経験がないので混声の曲を使ったことはありません。混声の曲を同声で歌うことはあるのですが…。

永井：では、歌唱をするときに先生がいちばん大切にしていることはなんでしょうか？

久保田：また難しい質問を…（笑）。今日もそうでしたが、イメージを大事にしたい、ということでしょうか。特に歌には歌詞があるので、イメージをどのように伝えるのか、ということですね。

永井：〔共通事項〕のところに「音色、リズム、速度…などの音楽を特徴付けている要素」と示されていますが、この「など」には歌詞も含まれていて、そこが大事だという話も耳にします。

先生の授業を拝見していて、そのことを強く感じました。

久保田：歌詞は本当に大事です。子どもたちが情景や気持ちを想像するときにもいちばん分かりやすい。「嵐」といえば「嵐」のイメージを思い浮かべることができますし、「青い空」といえば「どういう青かな？」と問いかけることができます。イメージすることで、子どもたちの表現も変わってきます。

永井：子どもが言葉にできないことも、



色に置き換えることで表現できるようになる、ということとつながりますね。

久保田：もちろん思うようにいかない場合もありますので、なんとなくそんな感じ、というものをまずつかんでももらえれば、と思います。

永井：子どもにも歌詞を読ませることがありますか？

久保田：読ませます。朗読させる、と言ったほうがいいのでしょうか。「ロボットみたいに読まないで！」と注意することもあります。

永井：朗読から歌唱へは、どのようにつなげていきますか？

久保田：例えば合唱団で『若返りの水』を扱いましたが、そのときに“むかしむかしの…じいさんとばあさんが…”というよりも、“むかーしむかーしの”と読むほうが感じが出るよね、じゃあそう歌ってみましょう”と言うと、自然に“むかーしむかーしの”と歌えるようになります。「読んでるように歌ってみて」と言うこともあります。

永井：朗読のとき、届ける先（見えない相手）にどこまで伝えたいか、ということを意識させますか？

久保田：とにかく相手に伝わるように、と言っています。自分がどんなに強く思っている、黙って相手の顔を見ているだけでは伝わらないよね、と。だから「しっかり伝えようとしなければ伝わらないから大げさに表現しましょう」と言っています。子どもたちの表現は、自分たちが思っているより控えめなことが多いんです。

授業者に訊く ②

中学校は、ペリー来航で有名な横須賀市浦賀を訪ねました。
全校生徒が900人を超す浦賀中学校では、合唱活動が盛んに行われています。
3年生の『大地讃頌』を教材にした授業では、
生徒たちによって主体的な学習活動が展開されていました。

授業者：古敷谷博明

横須賀市立浦賀中学校

本時の授業の位置付け

今回扱った「豊かな響きで合唱しよう」という題材では、生徒たちによる音取りから始め、主体的に合唱をつくっていく楽しみを味わうことをねらいとしています。

本時の授業では、

1. 音色の美しさを追求する。
2. バランスを考えて合唱する。
3. 歌詞の内容をイメージして合唱する。

ということに重点をおいて学習します。本題材では、正しい音程で歌い、徹底してハーモニーを感じることを目指しており、このあと他の題材での学習後、再び「合唱を深めよう」という内容で表現を追求していきます。

授業の流れ

	学習内容と学習活動	活動の意義と留意点
導入	○合唱の楽しさを感じ、人との触れ合いに音楽を生かす。 ・歓迎合唱「校歌」『夢の世界を』	○本校では来客を迎える際「歓迎合唱」を行っている。授業中の合唱や日常の合唱活動が単にその時だけのものでなく、本番（発表の場）のための準備であることを意識させ、いきいきと活動させたいねらいである。
展開	○前時の授業を振り返り本日の課題を明確にする。 ・前時の生徒の気づきをまとめた資料を配り課題を確認していく。 ・前時の録音をもう一度聴く。 ・本時の課題を確認する。 ○正しい音程で歌えるようにする。 ○各フレーズの立ち上がりがきちんと歌えるようにする。 ・パート練習する。 ・パートリーダーが資料を参考にパートに指示を出していく。 ○練習の成果を確認する。 ・パートごとに分かれたままで合唱する。 ・気付いたことを発表し合う。 ・録音を録り、前時と聴き比べてみる。	○生徒の気づきをまとめた資料は基本的に生徒の言葉で掲載し、用語の訂正や指導は口頭で行っていく。この活動で「根拠をもって批評する」等の言語活動の力をつけることを目的としている。また相互評価の場面としても価値付けている。 ○パート練習ではパートリーダーがじゅうぶんに機能するように、選出の場면을工夫することや、育てる場面をもつことが必要。 ○ア カペラで歌って確認するのが分かりやすい。取れていないときには音源を入れて歌わせる。
まとめ	○次の時間の課題を大まかに確認する。	○指導と評価の一体化を目指し、必ず実現したことと、やり残したことを確認する。

歌い、伝えてともに学ぶ

聞き手
黒木瑠美子
(横浜市立新羽中学校)

生徒のやる気を引き出す

黒木：まず男声の厚みに感動しました。パート練習でも、男子が積極的に音取りを進める様子はすばらしいですね。意欲的な男子はどのような指導をすれば育つのでしょうか。小学校では、特に高学年の男子の意識を高めるのが難しいんです。

古敷谷：音楽の授業だけではなかなか難しいですね…。もちろん授業はきちんとしたものにしたかったので、「今日の授業ではこれを取り上げよう」という点を明確にしています。ただし1年生のときはできるだけよいところを見つけてほめました。それと同時に専門的な言葉、例えば音階や音程といった用語をときどき入れるようにして、「自分たちは専門的なことを学んでいるのだ」という自尊心をくすぐっていきましました。1年生の前期だと速度と強弱を混同しているような生徒もいますから…。彼らの「気づき」も大事にしますが、指導すべきことは指導しています。あとはやはり日頃のコミュニケーションですね。

黒木：今日の授業のように、パートリーダーの生徒を中心にグループ練習をどんどん進める、という活動は習慣化されているのですか？

古敷谷：ある程度根付いた活動になっていると思います。パート練習では、



それぞれのパートリーダーが中心となって活動していますが、この学校ではクラス合唱全体を文化委員の生徒が進めるという特色があります。文化委員を決める際、必ず立候補者はオーディションのように校歌を歌って選ばれているんですよ。

黒木：文化委員やパートリーダーを信頼するという意識がみんなにあるわけですね。

古敷谷：みんなに「歌いましょう」と言うのであれば、まず自ら歌えなければ、ということです。合唱の総指揮という立場で、時には偉そうなことを言ってもいいんだと。こうした主体的な

練習方法はなかなかうまくいかない面があるものの、3年生にもなると形になってくるようです。

とにかくハモる！

黒木：今日の授業では、音楽の基礎的事項を押さえつつ、生徒たちに技能的な面の話をされていたと思うのですが、早い段階で歌詞のことに触れたり、あるいは「楽曲全体としてこういう意味があるんだよ」といった話をされたりもするのですか？

古敷谷：ある程度音が取れて歌えるようになってきてから、そうした指導をしたいと思っています。なぜなら、こ

の『大地讃頌』では「4声でハモることの気持ちよさ」をまず体感してもらいたい、ということを目指しているからです。ですからこの曲をもっと深めようというときに組曲全曲あるいはオーケストラと合唱による演奏などを聴くことができればいいなと思っています。

黒木:ソプラノの“ははなるだいち〜”という歌いだしが、レガートでとてもきれいだなと感じました。それでオーケストラ伴奏による演奏の鑑賞や、組曲についての話をすでにされているのかな、と思ったのです。

古敷谷:まだです。毎年、3年生が歌っているのを校内で聴いたり、合唱交流という形で聴いたりする機会があるので、レガートで歌っているのかもしれない。どうしても音が下がってしまうので、最初は f で歌わせていますが、音程が安定してきたら p にすることを目標にしています。

黒木:合唱に取り組むとき、歌詞の読みはどうされているのですか？

古敷谷:音から入りますので、まだ歌詞の読みはしていません。卒業式関連の曲では、イメージしやすくするために、「さあ、1度詩を朗読してみよう」ということもあります。いつもはあまりしません。でも器楽の活動のように音だけが先行してしまうと、フレーズがブツブツ切れてしまいがちになるなどの課題は感じています。今回の題材では、歌詞をイメージすることや内容を把握して背景にあるものを理解す

ることについて、「ああ、先にしておけばよかったかな」と思いました。

伝え合う学習活動

黒木:パート練習の話題に戻りますが、生徒たちはパートごとにとても活発に意見を出し合っていました。発言を引き出して、それをつなげていくような指導をされているのですか？

古敷谷:自分が感じたり気付いたりしたことを言葉にして書き、友達がどう表現したのかを知るようにさせています。用紙には名前も記入します。言葉で表現するのは難しいことですが、友達がどう感じたのかを知ることによって、自分が思ったことを整理することができるのだと思います。そうすれば、次のときには自分もその言葉を使って発言できます。また、書いた人の名前も分かるので「あの子は自分と同じ感覚をもっていたんだ」と気付くことができますよね。生徒たちの相互評価に

もつながっていると思います。歌唱の他に鑑賞と和楽器の題材でも同様に行っています。

黒木:小学校で子どもの言語力を育てたいとなると、教師がたくさんの言葉を使いがちですが、中学校では生徒どうしで互いの言葉から学習することができるんですね。「僕はこのことを言いたかったのに、言葉にできなかった——でも次はこの表現を使って言うことができる」と。

古敷谷:そうですね。今日も吹奏楽部の生徒の発言に「拍を感じて歌う」などというのがありました。パートリーダーや、吹奏楽部の生徒でいろいろ伝えることができる子の発言を「こうまねすればいいのか」と感じるのだと思います。

黒木:パート練習で音取りだけしていると生徒たちの注意力も散漫になるので、曲の内容から入るとよい、といった話も耳にしたことがありますが、そ





●こしきや・ひろあき
横須賀市立浦賀中学校総括教諭

の心配はありませんね。

古敷谷：きちんとハーモニーをつくった中に自分がいる心地よさを、生徒たちは忘れません。この学校では、3年生でメロディーとハーモニーに視点を置いて四部合唱をしますが、そうした活動がなかなか成立しない学校に私もいたことがあります。ずっと音取りしているだけでは集中力が保てないので、そういったときは友達からの評価を聞く活動につなげています。また、リコーダーを入れたり、いろいろなリズム打ちをしたり、リトミック的な要素を取り入れたりすることもあります。

黒木：3年生で四部合唱ということですが、中学1年生、2年生では二部合唱が主で、3年生になると四部合唱をするというような流れがあるのですか？

古敷谷：校内の合唱コンクールでは、1年生には難しい曲は歌わせません。二部合唱の曲でも、どんなに簡単な曲でも、「きちんと歌えば賞がとれるよ」と言っています。2年生の後半になって初めて四部合唱を1曲経験させています。

小学校で身につけてほしいこと

黒木：話題は変わりますが、今、中学校の授業では合唱以外はどのような内容になっているのでしょうか？

古敷谷：学習指導要領の鑑賞の項に「根拠をもって批評する」という文言があります。「なぜこの音楽は魅力的なんだろう？」「なぜこの曲を魅力的に感じるのだろうか？」と問いかけたときに、その理由が例えば転調ならば、「転調とは何か」について生徒が理解できるように教えたいですね。ますます学習内容を焦点化することや教材選びが重要になってきそうです。

黒木：私は小学校の教師なので伺いたいのですが、この内容は小学校のうちに身につけておいてほしい、というものはありますか？

古敷谷：そうですね…。月並みですが、さまざまな音楽体験をして、楽しく歌ってきた子どもたちは、新しい学習内容をどんどん吸収していきます。たとえ難しく専門的な内容であったとしてもです。

黒木：私は筆記テストで音符などを扱ったことがあまりないのですが、中学校では楽典内容がテストで出題される

んですよね？

古敷谷：表現を追求していくと、結局は読譜力に直面することになります。生徒たちは、音符の長さを知っている吹奏楽部の生徒をとてもうらやましがります。部活のように毎日一生懸命にしなくても、音楽の授業でまじめに取り組めばできるよとは言うものの、テストの前にできない子どもたちを集めて指導することもあります。音符の名前とその長さが分らないと、自分で練習できませんので、そこだけは押さえています。

黒木：読譜の指導はしますがテストをしていませんので、身につけているかどうか心配になることがあります。テストがよい影響を与えることもありますか？

古敷谷：基礎的事項が身につけていれば、音符を読むのが速くなるので、歌えるようになるのも早くなります。例えば、今までは聴き覚えで歌っていた子どもが、音の長さは正確に分からなくても、音の高低が分かるようになるなど、ソルフェージュの能力がついてくるんです。だから筆記テストを繰り返します。忘れてしま





ってもかまわないので、一度は小学校で基礎的な内容をきちんと指導していただきたいですね。「忘れたけど習った覚えはある」ということであれば、「それならすぐ思い出すよ」と中学校で指導していきたいと思います。

歌いながら育てほしい

黒木：合唱指導について再びお聞きします。文化委員を選出するとき、歌のオーディションをするとのことでしたが、他の生徒も1人で歌う機会はあるのですか？

古敷谷：歌の試験のときは、1人ずつみんなの前で歌います。お客さんあつての音楽だと思っていますので、楽しく歌おうと。その際生徒たちにも観点別に評価をさせます。そして必ず、もう一度聴きたい2人を選ばせているんです。エキシビションと呼んでいます。なかなかよい演奏が出てきますよ。生徒たちがもう一度聴きたいと選ぶのは、1人は誰が聴いてもすばらしい演奏をしている生徒、もう1人は歌い方

に特徴があるなど、個性的な表現をしている生徒という傾向です。そこがおもしろい視点だなと感じますし、生徒たちの評価なので大事にしたいですね。

黒木：生徒たちの声量が豊かなのは、歌うことに慣れるといった気持ちの面を育てていращやるからかな、と思いました。私も新任の頃、みんなの前で歌うテストをしていたのですが、子どもたちの抵抗が大きくて…。小学校ではみんなの前で歌うテストをあまり聞きませんが、中学1年の初めからみんな歌えたのですか？

古敷谷：そうですね…歌えませんでしたね。入学直後はとにかく校歌を覚えることから始めますが、部活動のオリエンテーションのときに、3年生のパートリーダーによる選抜の合唱団が1年生のところへバンバン行くんです。「中学生になったらこうやって歌うものなんだよ」と感じてもらえるよう、何曲か披露します。この活動には影響力があり、けっこう1年生が歌うようになります。先輩が怖いからかもしれませんが(笑)。

黒木：中学校では合唱に割く時間が少なくなってきたと伺いますが…。

古敷谷：鑑賞の授業もありますし、創作も和楽器もありますからね。でも、昼休みに「ソプラノの音、取ろうか」と呼びかけると、生徒たちは嫌がらないで来ますし、放課後に10分ぐらい合唱練習の時間もあります。それが授業のサポートになっていますね。

黒木：お話を伺っていると、古敷谷先



●くろぎ・るみこ

横浜市立新羽中学校教諭

※黒木先生は小学校の先生ですが、今年度は中学校へ赴任なさっています。

生が生徒たちの歌声や歌う気持ちをととても大事にされているように感じますが、「声」から音楽を楽しませたいということなのでしょうか？

古敷谷：「生涯にわたって音楽を愛好しようとする思い」というと大げさかもしれませんが、今まで経験したことがある日突然、芽を出すことがあると思います。そこを大事にしたいのです。中学校では発声に気をつけて積極的に歌った——それで終わりにするのではなく、生徒たちが高校に進んで周りの友達が歌わないときでも「君たちは歌ってほしい。たとえ周りが歌わなくても」という思いを私はもっています。歌うことでいろいろな人とコミュニケーションを取ることができ、友達も増えるんだよと伝えたいですね。

急に冷えこんだ朝、雪虫が舞った。
両手をそっと差し出すと、ふわっとすり抜けて消え、眼をこらすと、ずっと先を雪のように頼りなく飛んでいく。

後期は学生一人40分程度の模擬授業を展開している。

今日の模擬授業は、香川県出身のたださんから。朝、一時間早く来て「ドキドキが止まらない」と言いながらも、せつせと授業の用意をしていた。

小学生に扮する仲間の前での教師役は少々照れるらしい。廊下に出て教室の扉を開けながら、

先生「皆さん、おはようございます。今日、皆さんの授業をする、ただあやのです」

黒板に大きく自分の名前を板書する。

先生「今朝は雪虫が舞って寒くなるようです。風邪の人はいませんか？少し身体を温めましょう」

児童「体操するの？」

先生「椅子を持って丸く座りましょう。そう、では、音楽に合わせて椅子の回りを歩きますよ」

児童「ジングルベルだ!!♪ジングルベル……」

先生「八つ行ったら反対まわり。ぶつかったら“ゴメンナサイ!”と言ってね。今度は音楽が止まったら、椅子に座りましょう。私も仲間に入りますよ」

椅子が一つ足りなくなった。音楽を止めると「わっ!」と椅子を奪い合う。お尻とお尻がぶつかって、椅子から落ちる者、ジャンケンをして椅子を奪う者…教室の中が元気に賑やかになる。

先生「自分の席にもどりましょう。温かくなったでしょう?…もうすぐクリスマスですね。今日は先生が素敵なお話をプレゼントします。ジャン!!」

と、開いた絵本は『手ぶくろを買いに』(新美南吉文、いもとようこ絵)。長い文章を短い話し言葉に置き換えながら、一枚一枚ページをめくる。

先生「小ぎつねは、お母さんの所に手



ぶくろを買って無事に帰れてよかったですね。皆の教科書の小ぎつねさんは、どうかな?『小ぎつね』を開いて見ましょう」

黒板に大きな小ぎつねの絵が貼られる。「可愛い!!」と児童たち。「手ぶくろもハイ!」小ぎつねの手の上に赤い小さな手袋がのせられる。

先生「では、小ぎつねさんのことを思っ歌いましょう!」

小ぎつね コンコン
山の中 山の中
草のみ つぶして
…… ……

先生「さっきの手ぶくろを買に行った小ぎつねさんのように、とっても可愛く歌えました。次は、やっちゃんと友ちゃんが二人で歌ってくれます。“小ぎつね コンコン”に動作を入れて。“山の中 山の中”は、二人で何かやってみましょうか。後はみんなだね」

身体表現がちよっと入るだけで、歌声がもっと楽しくなる。

先生「楽しかったですか。次の授業は、ドレミと指の練習をします。ドレミの指輪を作って練習しましょう」

授業を終えてからの感想…

◆自評 もっと考えていたのに、段どりがうまく流れなかった。

◆感想 授業の中に動と静があり、メリハリがあり楽しい。／絵本の読み聞かせに工夫があつて、それに優しい口調がいい。だから歌になった時、その気持ちが残った。やんちゃな2年生もどならない歌い方をするのでは。／小ぎつねの絵に、手袋を着けてあげるのははなまる!

エッセイ

風の音

前田美子
Maeda Yoshiko

次は茨城県出身のくろださんの授業。
先生「ピカピカの1年生の皆さん、春ですよ！おはようございます。学校に慣れたかな。私の名前は？」

児童「くろだあやほ」

先生「そう、覚えてくれてありがとう。今日は、歌を歌ってもっと皆さんと仲良しになりたいです」

袋からガサゴソと何か取り出す。

先生「さあ、何が出て来るかな？」

中から出てきたのは、ぞうさん、チューリップ、ちょうちょう…

児童「先生、わかった！歌でしょう!!」「先生、それ作ったの?」

袋の中から次々と出てくる絵を見てあっけにとられてか、皆静まる。本物の小学生だったら歓声が上がるはずなのに。思わず私が声をかけた。

“どうしたの、昔の1年生君！静かな場面じゃないはずよ!”

すると皆は背きながら、「たしかに……」「子どもたちの声が聞こえて来る気がする」「すっごく喜んで、きつと前に出て来るよ」

絵は9枚。色画用紙の切り張りだから、立体的に見える。チョークで川をぐにやぐにやと入れながらかわいいメダカを5匹貼る。

先生「さあ、歌ってみて。みんな知ってるかな？」

次々に歌い出した。絵に付いた数字にも意味があるらしい。

「②ぞうさん ぞうさん おはなが…」

「③さいた さいた チューリップ…」

「③ことりは とつてもうたがすき…」

「④やねより たかい こいのぼり…」

「⑤あんまりいそいで ごつつんこ…」

「⑤めだかの がっこうは…」

「⑥まいごのまいごの こねこさん…」

「⑥こぶた たぬき きつね…」

先生「よく知ってますね。幼稚園や保育園で歌いましたか。そう、どの歌が好き？」

話しながら、また紙袋の中をゴソゴソ。

児童「先生、その袋は魔法の袋ですか」



先生「そうですよ。楽しい音楽がいっぱい入っているの……す」

と言って取り出した大きなサイコロ。「②だ」次は「⑥」。代わりばんこに転がす。

先生「さあこれから、この間、皆で歌った『手と手であくしゅ』を歌いながら歩きます。サイコロを転がして出た目の数の人と一緒に握手しましょう。それから、その番号の歌を一緒に歌います。サイコロ③が出たら三人と仲良く握手。③の番号の歌、チューリップ、ちょうちょうを丸くなって歌います。大丈夫？やってみる？」

児童「①がないよ!!」

先生「そうよく気がつきました。①が出たら一人ぼっち。“一人ぼっちはつまらない”と踊ってください」

児童「えっ!!」「やろうやろう」

おはよう あくしゅ
てと てで あいさつ
わくわく あくしゅ

サイコロが転がされる。わっと輪ができ、握手と笑顔と歌が広がる。

先生「次の時間は、この間、皆が自分の名前を書いた名刺を使って歌いましょうね」

授業を終えてからの感想…

◆自評 やるまで、頭がいっぱいで指導案とかできなくて、でも絵を作って、サイコロを作っている間に楽しくなりました。もう少し考えて、落ち着いてやりたかったです。

◆感想 黒板に、いろいろな絵が出るたびに、もうそれだけでわくわくした。／用意にどれ位かかったの？／工夫が楽しさをドンドン広げて、いっぱい歌えた。

模擬授業で大切にしているのは、自分らしさ。無理をしない、だからと言って“流されない”（学生は、“スルーしない”とか言っている）。学生の相談にはいつでもものようにしているが、中には「私はムリムリ。指導案なんて書けないし、授業するなんて考えただけでもやれないよ〜!!」と甘ったれる者もいる。それだけ自分を出してムリだと言えるのだから大丈夫、と信じて「やろう」をひき出す。「指導案を書くのはプロの先生だって苦労してるんだよ」と言う「そうなんだ」と次第にスイッチが入っていく。スイッチ・オンは嬉しい。

そして何より、自分が楽しい授業は、皆も楽しい。

授業が終わり、興奮しながらの「先生、楽しかった」の一言が、私を温かくしてくれる。

どんなに寒い日も…



●まえだ・よしこ

東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。

現在、東京女子体育大学講師。むさしのジュニア合唱団「風」指揮者。全日本合唱教育研究会理事。

著書に『子どもと歩く』『レパートリーを広げる小学生の合唱（CD付楽譜集）』など（いずれも音楽之友社）。

いま、若手音楽教員は
どのような課題に直面しているのか?!

教職歴1～10年程度の 教員に対するアンケートから 見えてくるもの

山崎正彦(武蔵野音楽大学)
[情報提供] 佐野 靖(東京藝術大学)

本稿は、平成22年10月16日、東京藝術大学で開催された「平成22年度全日本音楽教育研究会大学部会大会」で発表されたアンケート結果をもとに、調査を担当した山崎正彦と佐野靖が再構成したものである。

全日本音楽教育研究会大学部会では、音楽教員養成課程改善のための手掛かりを求めて、教職歴1～10年程度の音楽教員を対象をしぼり、アンケート調査を実施した。若手・中堅の音楽教員が、日常どのような点に悩みを抱え、課題意識をもっているのか、また、その悩みや課題をどのように克服しているのかなどについて、大学部会が学校現場の実践課題を共有する必要があると考えたからである。

結果、計160名の先生方から回答をいただいた。回答者の内訳は、小学校99名、中学校52名、高等学校8名、特別支援学校1名である。ご協力いただいた先生方に、あらためて深く感謝申し上げたい。

具体的な質問項目は、「音楽科の学習指導」として、「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」「日本の伝統音楽」「鑑賞」、さらに「授業以外の音楽活動」として、「行事等とのかかわり」「部活動・課外活動」である。項目ごとに、「指導法」「教材」「自己の知識や技能、音楽経験にかかわること」「その他（評価等）」の事項を設け、特に問題や困難を感じている項目・事項を選択して、その内容についてすべて自由に記述する方法で実施した。

以下、各活動領域等における特徴的な内容ごとに主な意見を示しながら、今日的な課題を考察することにした。

執筆は、「歌唱」「器楽」「音楽づくり・創作」「日本の伝統音楽」を佐野、「鑑賞」「行事等とのかかわり」「部活動・課外活動」を山崎が担当する。



※アンケート内容の文字使いは、
各回答の表記を基本的に使用しています。

1. 歌唱の指導

(1) 歌唱への意欲・モチベーション、態勢・環境づくり

○高学年になると「音がとれないこと」や「みんなの前でははずかしい」というような感じで歌わなくなる。「歌える」環境をどのように作ればよいかわからない。

(2) 練習や活動の状況、指導の言葉

○指導をしている時の声かけの言葉がワンパターンになりがち。発声の方法や曲に合わせた具体的な指導の時、どのような言葉で表現すると伝わるのか、分からなくなって困っている。
○…音とりがうまくできない。…カセットデッキで、部屋の四隅で、パートごとに練習をしている現状。…もっと専門的に教えたいが、音とりの声かけが中心になってしまっている。「音とりができたならその歌はできた」という生徒の意識につながってしまうのではないか心配。

(3) 声にかかわる課題

○歌う前に曲のイメージを子どもたちに話してから指導はするが、子どもたちは、大きな声を出すことに意欲をもてしまい、「きれいな声で」とかしずかな曲の時は、なかなか思うよう指導できない。
○ポップス系の歌唱法を変えようとしないうちに生徒に対してクラシカルな発声の方がよい（適している）ことをどのように伝えたらよいのか。なまじカラオケなどで訓練されていて自信を持っている場合は特に。

(4) 子どもにふさわしい教材の選択・開発、共通教材の取り扱い

○合唱教材で歌詞の内容の良いもの（生徒の思春期の心情に合い、歌詞の内容を考えて、自分の気持ちを深められるもの）は、混声四部の難しいものが多く、2年生や歌の不得意な学年のときの3年生で取り組む良い曲が中々なくて困る。特に合唱コンクールではクラス数分曲を準備しなければならないので。

(5) 評価・テスト

○歌のテストをした結果を生徒につたえ「～が良かった」など評価を明確にしているがA・B・Cの「C」の生徒に対しては伝えにくい。聞きたい生徒だけが聞きにくる方法も取り入れたが「C」の生徒はもろく聞きに来ないし、向上もしない。評価によって生徒が前向きになれる方法を教えてもらいたい。

(6) 教師の経験、知識・技能に関する課題、教職課程への提案

○器楽科出身者にとって、大学の声楽授業ではドイツ・イタリア歌曲などあまりにも専門的な楽曲が多すぎる上、音程があっているかどうかの指導が多く、歌う時の姿勢や呼吸法などにはあまり触れられずに終わった。教職課程を履修する上で小学生でも歌える歌、分かんない方について勉強したかった。

歌唱の指導に関して、回答数が最も多かったのが「声にかかわる課題」である。小学校では、どなったような声で歌うことをあげる教員も多く、また、「声が頭の方に抜けてしまい、前に飛ばすことが難しい」などの回答も見られた。元気よく大きな声で歌うことを強調するあまりの弊害や、逆に、いわゆる頭声の発声のマイナス面が表れているといえよう。中学校では、やはり変声期の男子生徒への指導の難しさ、例えば「オクターブ上で歌うと、同じ高さで歌おうと一生懸命音を探ります。オクターブ下で歌うと、もっと低い音でがんばろうとしてしまい、うまく伝わりません」などの意見が寄せられている。

パート練習の仕方でも歌唱指導の大きな課題である。とりわけ合唱コンクールが盛んな中学校では、「パートリーダーの育て方がわからない」など、効果的なパート練習の方法を求める声が多い。また、指導の際の言葉掛けのタイミングや豊かな言語表現など、教師側に言語的な能力が求められている。教材にかかわっては、題材における共通教材の扱い方の難しさ（小学校）、どのパートも歌い甲斐のある合唱曲がとて少ない（中学校）などの指摘が印象的である。

評価やテストに関しては、「テストという形で1人または数人で歌わせるとはずかしさから声が出なくなってしまう。全体で歌っている中では一人ひとりの声を聴き取ることがむずかしい」という評価方法の課題や、どうしても教師の主観的な評価になりがちで、客観的な評価の難しさを問う声も寄せられている。

大学の教員養成に関する問題提起や提案としては、実際の指導に役立つレッスンや講義を望む声も強い。教職課程における実技関係のレッスン・講義のあり方を問い直す必要があることはいうまでもない。（文責：佐野）

2. 器楽の指導

器楽指導に関しては、授業時間や楽器など様々な制約の中で、いかに効率よく指導を展開するかが大きな課題となっている。また、歌唱の際にも指摘されたが、ここでも教師の言語表現の豊かさが問われている。どの活動においても、「表現を工夫して」は頻繁に使用される指導言であるが、具体的な内容が示されず、ただ「工夫」が連呼されているケースも少なくない。何をどう工夫するのか、子どもにわかりやすく具体的に示すことは、器楽の学習指導に限らず、重要な課題である。

さらに、リコーダーなど一斉活動の中で個の状況や育ちを見取ることの難しさ、個別指導で他の子どもたちの練習をコントロールすることの難しさなどとともに、子どもの実態に合った教材の不足に対する声も寄せられている。例えば、難易度の極端なものが多く、少ない音でも達成感を味わえるような曲がもっと身近にほしいというものである。

教師自身の経験等にかかわっては、様々な楽器をどのように扱えばよいのかへのとまどいが多く見られる。特に、小学校段階では様々な打楽器の奏法や扱い方に関する知識が必要とされている。教員養成課程や教師教育の課題として受け止めたい。（文責：佐野）

(1) 合奏における諸課題～様々な制約（時間・楽器等）の中で～

○合奏指導において楽器の数のバランスや調整の仕方、人数の振り分け方がわからない。
○…グループでの合奏をする際「表現を工夫して」という時に自分自身の指導が未熟なため、工夫とはどういうことかを具体的に伝えられなくて困っている。

(2) 個人差への対応

○リコーダーなど個人差が出やすいものの指導をする際、どうしても個別の指導がしきれない実態がある。TTをやっていた頃はそれがスムーズに行うことができたが、教科指導も1人で担任を持っていると時間も取りにくく、どのようにしたらいいか模索中である。

(3) リコーダー指導

○全員が初めて手に持ち、ゼロから同じような指導をしているリコーダーなのが…授業が始まって三か月くらいで少しずつ差が出てきているのが気になる。また、他の学年の合奏では音を止めるルールを徹底しないと、説明が届かないほど音があふれかえってしまう。

(4) 子どもの実態に合った選曲・編曲

○器楽指導の選曲は難しい。難しすぎても途中で生徒が挫折してしまう（やる気をなくしてしまう）だろうし、簡単すぎても達成感がもてにくい。ある程度演奏しやすいフレーズやリズム等の曲で、かつ、演奏するとそれなりの形になる曲を見つけるのはなかなか大変。また、演奏しやすいようにアレンジしたりもするので、そういう技術がある程度身につけているとやりやすいように感じる。

(5) 教師自身の経験、知識・技能の不足

○…活動を通してねらいにせまる前に、様々な楽器の扱いでとまどいを感じている。自分の音楽経験とも深く関わっており、専攻以外のことも広く学んでおけばよかったと反省している。これは、課外で任せられる金管バンドについても言えること。
○コードの知識や即興的な演奏技術がないので、なかなか生徒個々のニーズに対応できない。

3. 音楽づくり・創作の指導

(1) この領域で身に付ける能力、目指すところ

○年間35時間のなかで、どのような取り組み方があるのか。また、創作を行う上で、生徒たちに付けておきたい力（3年間で積み上げておきたいこと）にはどんなものがあるのか。自分自身も勉強したいのですが、どの程度まで、できればいいのか生徒に力として付けられるのかよくわかりません。

(2) 指導のプロセス、活動の発展性

- 音遊びやリズム遊びどまりで、音から音楽へ構成するための段階的な指導法・手だてがわからない。
- リズムづくり、旋律づくりの経験が少ない生徒達に限られた時間で作品作りをするのが難しい。音符・休符の基礎・基本から記譜できるようになるまでの（生徒が思うリズムを自分で記譜できるようにするのは時間がかかる）過程の指導が難しいと感じる。

(3) 評価

- 時間があまりとれない創作は作品の評価よりもほとんど取り組み方にかたよってしまう。又、仕上がった作品について自分なりの評価をするのに自信がもてない。
- グループで作品を創作することが多いが、一人一人の評価を適切に行う方法がわからず、模索中。

(4) 記譜・読譜

- 生徒は大変関心を持っていることを常々感じているが、実際に曲として完成させることの難しさを感じている。「楽譜を書く」という点にはどこまでこだわればよいのか悩んでいる。

(5) 教師自身の経験不足、大学と実践のギャップ

- 大学の時に音楽づくりについて勉強する機会があったので現場で試してみたが、児童の態度や経験によってできあがるものが違うことが多くあり、指導法に関して悩んでいる。教材についても選択が難しい。
- 自分自身がこうした学習を経験しておらず、大学でも具体的な指導法を勉強しなかった中で、どのように題材を設定しようか悩むことが多い。

歌唱、器楽、鑑賞と比較して顕著なのは、教師自身の経験不足、ならびに大学における学習と実践とのギャップ等について多数の回答(24件)が寄せられている点である。教員養成の段階で身に付けておきたい基礎・基本は何なのか、また実践経験の中で方法論を発展させていくために何が必要なのかなど、音楽科の教師教育全体にかかわる焦眉の課題と受け止める必要がある。

限られた時間数の中で、活動をどう発展させていくかも大きな実践課題である。具体的には、「単に音を並べただけのものやリズムパターンを適当に並べただけのもの」で終わってしまうことへの懸念や、個やグループでつくったものをクラス全体として広げていくことの難しさなどである。

評価に関しては、取り組み方に偏ってしまうことに課題を感じている教師がいる一方で、作品の評価になりにかぬないところに課題を感じている教師も少なくない。また、どのような点で工夫されている、されていないと評価するのか、観点が定まっていないとの指摘もある。つくろうとする意図は明確であるが、それを演奏や楽譜にうまく表せない子ども、うまく楽譜等に記すことはできるが演奏で表現することは苦手な子どもなど、一人一人の能力の出方が異なる状況での評価はとても難しい。実践者と研究者らが連携した実践研究が望まれる。(文責：佐野)

4. 日本の伝統音楽の指導

回答者160名のうち104名が、「日本の伝統音楽の指導」の項目・事項を課題として取り上げている。その多くが、教師自身の経験や知識・技能の不足に端を発するもので、そこに楽器や予算、教材の不足などが重なり、指導に対する抵抗感や自信のなさ、指導法の硬直化などの悪循環を招いていると察せられる。

箏を中心に和楽器に関しては、何らかの形で大学において経験できる状況が整ってきているように思われるが、伝統的な歌唱に関しては、まだ学習環境がそれほど整備されていない状況がある。教師自身、「発声やコブシ」などができない、民謡を歌わせたいが自分が歌えないなどの回答が寄せられている。さらに、和楽器の手配や準備に関する事情も深刻である。「拠点校にある和楽器を運ぶための運搬費」の負担は、現場の切なる声である。

指導法に対する自信のなさや指導プロセスの硬直化は、もちろん教師の経験不足に起因するものであるが、教科書の内容に関しても問題が指摘されている。具体的には、小・中学校での教材選択の問題や、歌舞伎・文楽などにかかわる内容の不十分さである。

子どもと伝統音楽との距離感については、和太鼓が子どもの身体に根付いているという意見がある一方で、「アップテンポの曲に慣れている児童なので、なかなか難しい」との指摘もある。最初は子どもが興味・関心を示しても、それを継続できないという背景には、やはり教師側の教材研究不足や、教師自身が伝統音楽のもつ魅力を実感できていない状況があると考えられる。

こうした状況を克服すべく、自身で和楽器を習う機会を求めている教師は少なくない。教職課程での学習を充実させることはいうまでもないが、地域と連携して、現職教師の学習にも協力していくことが大学に求められている。(文責：佐野)

(1) 教師自身の経験や知識・技能等の不足、楽器・予算等の不足

- 何をどうしたらいいのかわからない。興味のもとせ方、奏法など。大学では箏は触れたが他の楽器はない。楽器の手配、準備に関しても困っている。
- 自分自身に十分な経験歴がなく、…生徒に達成感や成就感をもたせられるかがとても不安である。

(2) 指導の硬直化・発展性のなさ

- 和楽器経験がないので、箏の授業をしているものの、パターン化してしまい、いまいち発展しない。

(3) 教科書や教材に関する課題

- 自分の経験が乏しいが教員になって学んだりして、演奏する機会を持ったことで若干の自信がついた。箏に関しては一通りの実践を行ってきたが、他の分野へ広げたい。また、歌舞伎や文楽などをしっかりと取り組みたいが教科書の内容も不十分ではないかと感じている。

(4) 子どもと伝統音楽との距離感

- 日本ばい、昔みたい、聴いたことがあると始めのうちは関心を持つが、難しい。歌い辛いとその意欲が継続できない。

(5) 大学時代の活動体験、学ぶ機会を!

- 大学時代で触れた伝統楽器が箏だけなので、笛がなかなか取り組めない。現校は箏も5面しかなく、生徒にいわたらず、練習がはかどらない。
- 前任校は、三味線、現在は箏があるが、大学で少し学んだ程度なので指導するには経験がなさ過ぎる。独学で勉強して指導するには専門的過ぎるので実際に経験をつまないと難しい。プライベートで習いに行っていたが時間や金銭的にも厳しい。

5. 鑑賞の指導

(1) 教材の選択、教材の活用、教材の開発について

- 鑑賞教材の不足が課題。なかなか指導にあった適切な教材が提供できていない。幅広い教材選びが難しい。
- 鑑賞教材について、教科書に載っている楽曲以外のものを取り上げたいが、選択の視点、教育課程との関連性、教材として考える時の留意点が明確に定まらない。

(2) 評価について

- 評価について、鑑賞文の評価をする際、どうしても書く力のある生徒の評価が高くなってしまい、もしかすると聴き取ることができているのに文章にできていない生徒がいるのではないかと心配になる。
- 評価を批評文で行っているが、これを書かせるのが難しい。(生徒の語彙が足りない)

(3) 感想を書かせるだけの授業

- 指導というよりCDを聞かせてプリントに感じたことを書かせて、終わりにになってしまう。

(4) 表現と鑑賞の関連についての課題

- 鑑賞で扱った曲については児童はよく学習してくれるが、そこで学んだ音楽の要素を他の歌や楽器の演奏などの表現に生かしつつ、次につなげるような指導ができていない。

(5) 教師の経験、知識・技能に関する課題

- 作曲家、曲の背景、その時代の様子などを自分が詳しく知らないことも多く、十分に作品のよさを伝えられない。
- 題材と教材の不適合を感じても、それに変わる教材を持ってくる知識もないため、困っている。

(6) 発問についての課題

- 楽曲の中で感じ取らせたいことをどう導き出すか、どのような発問で引き出せばいいのか分からない。

表に挙げた問題点のいくつかに焦点をあててみたい。以下の3点は小学校、中学校に共通するものである。

- 1.有効な鑑賞教材が少なく困っている。(教材)
- 2.音楽を聴かせて感想を書くだけになっている。(授業)
- 3.感想文の評価では文章力のある生徒の評価が高くなってしまっている。(評価)

2は特に注目すべきで、鑑賞指導における課題意識として今も昔も変わらない。このことは当然、3のような学習評価に関わる課題意識も引き出すことになる。

1であるが、仮に児童生徒が好む教材が少ないという意味なら鑑賞指導の本質が誤解されている可能性もある。鑑賞指導においてまずすべきことは、楽曲を特徴付けている要素に目を向け、それを焦点化して聴かせるような指導ではないだろうか。例えば、児童生徒がそれまで聴き取れなかった音や音色が聴き取れるように、楽曲の聴きどころを意識して聴取させること。そして、聴き取れたものが何であるのかを音楽的な要素として確実に理解させることである。さらには、ある楽曲から感じ取れたことが、どの音楽的な要素によるものなのかを考え、もう一度、あるいは繰り返し音や音楽を聴いてそれを確認することが最終的なおさえどころである。

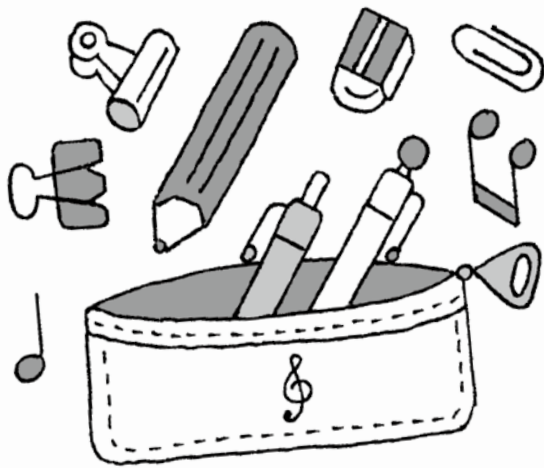
これらの経験を積むことで、音楽を聴き味わうということを児童生徒に実感させることが可能となり、鑑賞の能力にも迫って行くものと考えられる。よって、鑑賞指導では児童生徒がその楽曲を好むかどうかでなく、何より楽曲のもっている特徴が何であるのかを見出すことが重要である。そして何かが見出せたのなら、それが児童生徒にとって学ぶ価値があるものなのかどうかを見定めることも不可欠となる。これらに見通しがつけば、その楽曲は立派な教材であり、児童生徒がその楽曲を好む、好まないにかかわらず、彼らにそれを教材として提示することが出来る。

とは言え、児童生徒の好みは授業態度とも密接に関わるがゆえに軽視出来ない。そこで彼らを引き付ける鍵として、やはり指導方法である。その意味で、調査回答の「楽曲から感じ取らせたいことをどう導き出すか、どのような発問で引き出せばよいのか」という課題意識は、今後の鑑賞指導の改善につながる大切な一言である。楽曲のもつ特徴に自然と目を向けさせ、例えば「この不思議な音は何?」「どのように演奏しているのかな?」というような問いを児童生徒に抱かせるきっかけが発問と考えているのなら、まさにその通りと言えるからである。

自らの視点で楽曲の特徴を焦点化して教材性を見定める。児童生徒の興味や関心を引き出すように発問を工夫する。このような鑑賞指導では楽曲を聴いて感想を書くだけという事態は生じ辛いはずである。さらには、みとるべきは文章力でなく、楽曲からきちんと要素を聴き取っているか。楽曲から感じ取ったことを聴き取った要素と重ね合わせて述べる事が出来るか。評価観もこのように転換するはずである。

これらのことを教職課程に還元するなら、やはり学ぶための音楽鑑賞という、音楽鑑賞指導の本質を学生に理解させることや、教材、発問、評価のすべてが相互に関わり合う指導方法のあり方を理論的、すなわち誰が指導しても同じような効果が得られるものとして理解させることが責務と考える。

(文責：山崎)



●やまざき・まさひこ
武蔵野音楽大学教育学科講師

●さの・やすし
東京藝術大学教授

6. 行事等とのかかわり

小学校・中学校共通

(1) 行事の取組における他の教員（担任等）との関わりについて

- どの程度、担任や他の先生の力を借りてよいものかわからない。
- クラス担任、行事担当の先生との関わり方を知りたい。

(2) 企画・運営力について

- 授業の作り方は学んできたが、音楽科は音楽会などの行事の企画も行う場合もありうるので企画の方法を教えてください。

小学校のみ

(3) 行事（音楽会等）に関する課題

- 音楽会に3、4年で出場する予定となっているが器楽合奏の練習時間の確保が難しい。音楽の得意な子と苦手な子がいて、学年による差もあるので活動が限られてくる。他に音楽専科がないので担任の先生と授業を交代するなどして指導している。

(4) 音楽集会に関する課題

- 全校集会や行事での全員合唱、全員合奏の指導法に困っている。

中学校のみ

(5) 行事（合唱コンクール等）に関する課題

- 合唱コンクールの時期になると合唱ばかりの指導になり、他の領域の評価材料が少なくなり、どうしても偏った評価になってしまう。

これは小学校における音楽集会などの学校行事、中学校の合唱コンクールについての問題点を問うたものである。小学校、中学校共に、行事の取り組みにおける他の教員との関わりについてと、企画・運営力の2点が課題として数多く挙げられている。

前者は、まさに教員間のコミュニケーションの問題であり、仕事の分担や依頼の仕方に悩む実情が伝わってくる。後者では、赴任後直ぐに学校行事の企画や運営を任される立場となることへの戸惑いと、その負担の大きさや重圧感が挙げられている。

また、小学校からは、大学で学ばなかった全校集会や行事での全校合唱、合奏の指導方法に困っているという声が多く寄せられ、中学校からは、合唱コンクールが長期に及ぶので評価が偏るというような、音楽科の授業のあり方にも関わる課題意識が数多く報告されている。（文責：山崎）

7. 部活動・課外活動

小 学校から中学、高等学校に共通するものとして、自らの専攻以外の実技指導に関する課題と、部の運営に関する課題の2点が数多く挙げられている。

前者は、マーチングと吹奏楽の指導に関するものがほとんどで、迷いながら確信をもてずに指導を行っている実態が語られている。後者からは、指導者に展望があっても従来からの体制や指導方法が変え辛い現実と焦りとが伝わってくる。

また、小、中学校共通の課題としては時間的制約、他の教員の理解と協力、保護者との関わりなどの3点が挙げられている。なかでも時間的制約については、部活動の指導により授業準備もままならないという状況が伝えられ、回答者の多くが初任や赴任して数年目ということを考えると、その最も大切な時期に授業研究も満足に出来ない深刻な事態に直面していることが分かった。保護者との関わりについても、述べたような回答者の年齢だと年長の保護者との関係が心理的ストレスとなっていることも推測できる。

これらの他、中学校のみに見られる課題として指揮法が多数挙げられ、「楽団相手に指揮法を学ぶ経験があればよかった」というように、大学の教職課程に向けての直接的な意見も見られた。

この授業以外の音楽活動と部活動・課外活動に関する課題の多くは、共通する問題点に起因しており、それが音楽科教員の一人配置である。多くの学校において音楽科教員が一人のため、授業、学校行事、部活動のすべてを一人でや行かねばならず、何か不明な点が生じて一人ですべてを解決することになる。担うべき業務も多いことから、当然、長時間業務に追われ「休日も取れず、授業の準備もできない」という切実なコメントも見られる。

教職課程においては、これらのことをふまえ、学校現場の状況を学生に伝えることと、その状況を体験するための実習機会等の確保についてこれまで以上に努め、可能な限りそれを具現化することが求められていると言える。（文責：山崎）

小学校・中学校・高等学校共通

(1) 専攻以外の実技指導に関する課題

- 自分にマーチングや金管楽器の経験がないので指導の方法が分からず、迷いながらやっている。自分でやったことがないので技術的な指導ができず困っている。
- 吹奏楽の経験がないので、楽曲全体のアドバイスはできるが楽器の吹き方や初心者への指導はなかなかできない。今はなんとかたりたてはいるが、レベルアップさせたいので吹奏楽指導者を（大学から）派遣していただきたい。

(2) 運営・部の経営に関する課題

- 活動が勤務時間外のため、担当する先生の考え次第になっている。時間と活動内容の充実の兼ね合いが難しい。
- これまでの部活の経験（やり方）があり、なかなか体制がかえられない。

小学校・中学校共通

(3) 時間的制約について

- 授業の準備と校務分掌で余裕がないため、現在はクラブ活動のみで課外活動は行っていない。吹奏楽にずっと親しんできたこともあり、吹奏楽をやりたいと思っているが、仕事に追われ授業準備の時間も満足に取れない状況で課外活動を始めのに踏み切れずにいる。効率的に仕事をこなしていけるようになれば、また変わって来れると思う。

(4) 他の教員の理解や協力について

- 他の職員に理解されず、音楽部（個人的なものも含む）の思いが伝わらない。

(5) 保護者との関わりについて

- 保護者や地域とどの程度の関わりをもつべきか悩んでいる。
- 父母会などがあり、保護者やOBからのプレッシャーもある。

中学校のみ

(6) 指揮に関する課題

- 吹奏楽の経験はあっても全ての楽器を指導したり指揮することに不安がある。もっとクラブや楽団に入っておけばよかったと思う。また、楽団相手に指揮法を学ぶ経験があれば良かったと思う。